

『唐長』 関連史料による京唐紙の研究 史料の把握と整理

Study of KYO Karakami from KARACYO collection.

昭和女子大学国際文化研究所 客員研究員 小粥 祐子

(研究計画ないし研究手法の概略)

本研究は、日本建築の室内を飾った、柱と柱の間に作られる壁、空間を仕切るための襖、屏風に施される「唐紙」制作を、寛永元年（1624）創業以来、営々と家業として継続している京唐紙師『唐長』（京都府京都市）に伝わる史資料を把握し、整理することを目的としている。現在、京において唐紙を制作している工房はいくつかあるが、江戸時代から唐紙を作り続けている老舗は、唯一、『唐長』のみである。

「唐紙」とは、板木または型紙に彫った連続文様を雲母や顔料を用いて多色刷りした紙のことを言う。「唐紙」は、「ふるい」につけた顔料を板木にまんべんなくつけ、地となる和紙を板木にのせ手で柔らかく包むようにして和紙をなでて摺る。「ふるい」とは曲げ物の枠に布を貼ったもので、板木に色をのせるための道具である。地となる料紙は、和紙そのままの色を用いる場合と様々な色に着色された和紙を用いる場合とがある。現在、『唐長』で用いられている主たる和紙は、越前和紙とのことである。

「唐紙」は、中国大陸から渡来した紙を日本で模して作ったもので、当初は歌や俳諧を書くための詠草料紙に使われたが、次第に、建物の壁紙や襖紙、屏風の料紙として用いられるようになった。江戸時代になると、上層の武家住宅においては天井にも用いられるようになった。

『唐長』には、現在までに約650枚の板木が伝わっている。『唐長』は、寛永元2年（1624）年の創業以降、江戸時代を通じて2度の火災[天明8年（1788）の大火、元治元年（1864）蛤御門の変]を経験している。こうした中で、天明の大火では多くの板木を焼失したが、現在、『唐長』が所蔵している板木として最も古いものは、寛政3年（1791）開版の「九曜紋」であるという。この板木については、現在もその多くが現役で使われ、『唐長』修学院本店にある板木蔵の中に整理・保存されている。一方で、『唐長』に関する史資料については、何人かの研究者によって断片的に取り上げられているものの、総体的には明らかになっていなかった。

そこで、本研究の目標は、寛永元年（1624）から現在まで伝わる『唐長』に関する史資料の所在を把握することにあつた。

『唐長』は、天和元年（1861）から昭和45年（1970）までは、洛中（京都市内）の東洞院三条下ルにあつたが、その後、現在、『唐長』本店がある修学院水川原町に移転している。このような経緯もあって、『唐長』に伝わる史資料は、数か所に分散していた。



写真1 唐紙を摺る11代目千田堅吉氏



写真2 『唐長』の板木

このような状況の中で、本研究の調査の一環としてとして、まず、千田堅吉・郁子夫妻に依頼し、所在がわからなくなっていた史資料を探索し、発見された分を修学院本店に集める作業を行った。集められた史資料には「唐紙」に関するものだけでなく、江戸時代から現代までの千田家の生活や、各時代の社会の動きが明らかになる本などの資料も含まれていた。

次の段階として、本研究組織のメンバーである斎藤英俊（京都女子大学・教授）と筆者とで、集められた史資料の仮リストを作成し、次いで「唐紙」に関する史資料を選択・整理し、その後、斎藤ゼミの学生とともに「唐紙」に関する史資料をデジタルカメラで撮影した。

『唐長』に関わる史資料を調査しながら、千田堅吉・郁子夫妻より、江戸時代から現代までの「唐紙」業界の変化や『唐長』の取引先等について教示を得た。

なお、本報告に記す内容は『唐長』に関わる史資料一次調査の報告で、今後も引き続き『唐長』に関わる史資料の分析を続ける予定である。

（実験調査によって得られた新しい知見）

本研究により明らかになった『唐長』所蔵史資料は33点である（表1）。

表1 『唐長』所蔵史資料仮目録（一次調査）

史料番号	史料名	年記	形態	寸法(縦×横)mm	備考
1	天明八年申年以來帳計和書		1冊 19丁	130×300	
2	種文帳簿		1冊 2丁	124×336	
3	種書		1包 1点	包紙 360×235 綴じ 78×485	
4	(不明)	天保拾年庚正月	1包 8点	包紙 220×303 ①75×118 ②272×(188+188)=272×354 ③65×147 ④162×238 ⑤113×492 ⑥177×492 ⑦60×125 付箋 270×30 ⑧315×330 ⑨a 315×b 190 c 180×d 148 e 40(図2参照)⑩1142×30 ⑪154×30 ⑫141×30 ⑬140×30 ⑭1150×35 ⑮145×37 ⑯146×35	4丁を紙綴りしたものを包み紙で包んでいる。 天保拾年庚正月 新印有1枚 ②京の風習 黒谷の和紙1枚(2枚貼り付?) ③中地唐紙1枚 ④誕生月 上地唐紙1枚 ⑤11当のふこ餅え2つ折り1枚(②～④参照) ⑥千田ハルヒ丸書 和紙1丁 ⑦(表)裏表紙有付箋1枚 ⑧定 ⑨包紙有 左下唐紙唐長右衛門の文字記載 ⑩唐紙唐長右衛門 ⑪□(2)314(5)6(7)備考なし
5	元徳去帳写		1冊 31丁	240×165	
6	備後控		換入り	265×204	
7	(注文控書)		1冊 25丁	147×210	
8	大室朱(注文控書)	明治十四年辛巳七月一日	1冊 80丁	215×150	裏表紙に「三文字町 千田長右衛門」とあり 1丁目に「明治十四年辛巳七月一日」
9	(種段控か?)No9-13-連の史料		1枚 両面に記載事項あり	142×305	
10	(種段控か?)No9-13-連の史料	明治十二年卯二月六日	1枚 両面に記載事項あり	(280/2×2)×390	
11	(種段控か?)No9-13-連の史料		1枚 両面に記載事項あり	(285/2×2)×390	折紙 「明治十二年卯二月六日」
12	(種段控か?)No9-13-連の史料		1枚 両面に記載事項あり	(280/2×2)×390	折紙
13	(種段控か?)No9-13-連の史料		1枚 両面に記載事項あり	(285/2×2)×190(半分ちぎれたような形状)	「四月 光輪寺蔵」折紙 表裏内外とも華文字有
14	営業上り唐紙 明治17年	明治17年5月25日	1枚	251×341	
15	営業上り唐紙 明治17年	明治17年10月	1枚	245×334	
16	営業上り唐紙 明治20年	明治20年2月15日	1枚	230×320	
17	営業上り唐紙 明治21年	明治21年6月	1枚	239×170(せたいな長方形ではない)	
18	営業上り唐紙 明治21年	明治21年1月	1枚	238×171	
19	営業上り唐紙 明治22年	22年12月16日	1枚	240×163	
20	営業上り唐紙 明治22年	明治22年8月16日	1枚	240×161	
21	営業上り唐紙 明治23年	明治23年1月6日	1枚	248×(68+68+69+7)(破損のため数値不明、4つ折りの形状からおおよそ70～80)	
22	(注文書)	明治22年7月29日	1枚	270×395	4つ折り
23	種書(御印部)「村町」会通「種見本番号」		2枚	①320×320 ②230×320	
24	(種見本番号)		1枚	230×317	
25	粟九種村流田清左衛門工段取方申付		1枚	238×328	
26	(家計簿か?)		1枚	243×270(ちぎれ有)	
27	(注文書 大正11年11月)	大正11年11月	1冊 200丁	234×165 厚さ42	
28	(注文書 大正12年3月)	大正12年3月	1冊 199丁	234×165 厚さ45	
29	およねさま	天保九年	1包 14点	唐:383 包紙:244×332 ①包紙:313×203 文書:161×433 ②162×388 ③204×338 ④246×340 ⑤194×304 ⑥246×342 ⑦全体:245×342 2つ折り枚数:124×342 ⑧全体:252×342 2つ折り枚数:125×342 ⑨168×360 ⑩60×194 ⑪240×344 ⑫135×438 ⑬177×488 ⑭238×164	⑬「通」⑭「日」⑮1枚 ⑯奉願口上書 ⑰⑱ ⑲天保九年 ⑳有志通2つ折り1枚 ㉑十一年 2つ折り ㉒本年十二月より2つ折り ㉓金三換六換1枚 ㉔一帖五百円1枚 ㉕一、浄土宗1枚 ㉖紙1枚 ㉗金百足1枚 ㉘包紙
30	(注文書 絹着布)	—	1巻	132×129	
31	家買請状之書	天和元年辛酉拾月朔日	1巻	輪装:1143×612 本紙:312×492	天保十一年 富家古来…輪装:簡布袋入 輪天障裏に「富家古来…」の文字有 地紙:モミ唐紙(大倉モミ) 簡布袋に「天和年中 家買請のかけもの」の文字の布を縫付けている
32	会票		1冊	283×328	2つ折り
33	御詠唐紙本	天保八丁酉歳	1冊		

これら史資料は、次の5種類に大別される。

① 唐紙見本帳

史料番号 33

『唐長』の唐紙見本帳には、江戸時代のものとして十一代目・千田堅吉氏によって摺られた唐紙を郁子氏により見本帳に取り纏めたものがある。十一代目・千田堅吉氏による見本帳は、本研究においては所在を確認したが、本格的な調査は今後実施する予定である。

「御詠唐紙本」

天保8年(1837)

見本帳の表紙には、「御詠唐紙本」とあり、裏表紙には「千田長右衛門」とある。また、奥書には「天保八丁酉歳」とあり、当時の唐長当主千田長右衛門により、天保8年(1837)に制作されたこ

とが知られる。奥書にはさらに数文字が墨で消された痕跡があり、続いて、行を変えて「一冊内」と記されている。このことから、天保8年の見本帳は、1冊ではなく、2冊、あるいはそれ以上の冊で構成されていたと推測される。

なお、千田堅吉氏によると「御詠唐紙本」は、明治時代頃に千田家から流出したものらしく、京都市内の古書店に出たとの情報を得て、千田堅吉氏が購入したとのことである。

「御詠唐紙本」には唐紙51点が納められている。「御詠唐紙本」に納められた文様は主に桐、菊文様で、それぞれの模様は色使いを変えて何種類か納められている。また、地に紗綾形や網代文様を用いている。地の摺り色は、紙の色を地とする場合と紺鼠等の青系の色を用いるものが多くみられた。



写真3 「御詠唐紙本」の表紙



写真4 「御詠唐紙本」に納められた「陰日向桐」文様の唐紙

② 注文書

史料番号 4, 7, 8, 9~13, 22, 23, 24, 25, 27, 28, 29, 30

注文書は、江戸・明治・大正時代のものがあることを確認した。注文書は、1枚もの、施主ごとに包み紙で注文書がとりまとめられているもの、『唐長』で大福帳として帳簿に仕立てられているものがある。

1枚ものと包み紙で纏められているものは江戸時代のものに多くみられた。一方、大福帳として帳簿に仕立てられているものは明治・大正時代のものに多くみられた。

③ 『唐長』の経営に関わる文書

史料番号 14~21

『唐長』の経営に関わる文書として明治17年から明治23年にかけての「営業上り高届」がある。

「営業上り高御届」

明治17年(1884)~明治23年(1890)全8点

「営業上り高御届」は明治17年5月25日(表2-①)、明治17年10月(表2-②)、明治20年2月15日(表2-③)、明治21年8月(表2-④)、明治21年1月(表2-⑤)、明治22年2月12日(表2-⑥)、明治22年8月16日(表2-⑦)、明治23年1月6日(表2-⑧)の8回出されている。いずれも、下京区四組三文字町廿六番戸・千田長右衛門から届け出されたものである。

届け先は、「下京区長竹村藤兵衛」宛に出されているもの(③⑦⑧)と、「下京区第四組第五組第

六組 戸長前川榎溪殿」宛に出されているもの(④⑤)とがある。

業種をみると「唐紙卸売」(表2 - ①②③)あるいは「唐紙」(表2 - ④)、「唐紙商」(表2 - ⑧)との記載がある。これらのほかに、「形紙商」とある。

表2 「営業上り高御届」にみる記述

No.	届け出日	期間	業種	営業高	届け出た者	住所	届け出先
①	明治17年5月25日	明治16年1月～12月	唐紙卸売	278円80銭	千田長右衛門	下京区第四組三文字町	—
②	明治17年10月	明治17年1月～6月	唐紙卸売	150円10銭	千田長右衛門	下京区第四組三文字町	—
③	明治20年2月15日	明治19年1月～12月	唐紙卸売	170円	千田長右衛門	下京区第四組三文字町廿六番戸	下京区長竹村藤兵衛
④	明治21年1月	明治20年1月～12月	唐紙	80円	千田長右衛門	下京区第四組三文字町廿六番戸	下京区第四組第五組第六組 戸長前川榎溪
⑤	明治21年8月	明治21年1月～6月	—	71円50銭	千田長右衛門	下京区第四組三文字町廿六番戸	下京区第四組第五組第六組 戸長前川榎溪
⑥	明治22年2月12日	明治21年12月	—	68円50銭	千田長右衛門	三文字町	区長竹村藤兵衛
⑦	明治23年8月12日	明治22年1月～6月	形紙商	78円60銭	千田長右衛門	東洞院六角上ル三文字町	下京区長竹村藤兵衛
⑧	明治23年1月16日	明治22年1月～12月	唐紙商	180円	千田長右衛門	—	下京区長竹村藤兵衛

④ 唐紙師・千田家に関わる史資料

史料番号 5, 31

唐紙師としての千田家の歴史を辿る上で貴重な史料となるであろうものに「元過去帳写」「家買請状之事」がある。また、表1には挙げていないが、家系図も所蔵されている。家系図には、『唐長』6代目〔寛保2年(1742) - 文化4年(1807)〕から千田堅吉氏の父、10代目千田長次郎氏までが記されている。

⑤ 京唐紙師に関わる文書

史料番号 2, 3, 32

江戸時代に、京において唐紙師の組合が作られていたと考えられる文書が数点あることを確認した。また、唐紙を制作するにあたり具代などの高騰を抑えるための御触書なども含まれていた。



写真5 「廻章」に記された唐紙師13名の名前

(発表論文)

現時点では、なし。今後、史資料解説を進め発表していく予定である。